九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[057]九州大学応用力学研究所所報表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/4787632

出版情報：應用力學研究所所報. 57, 1982-10. 九州大学応用力学研究所
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

発　刊　の　辞

九州大学応用力学研究所船舶安全性部門教授工学博士故田才福造先生は，御病気療養中のところ，昭和56年10月10日九州大学医学部附属病院において逝去されました．行年59才，病名は肺がんでありました．

田才先生は大正10年12月21日福岡県に生れ，昭和20年9月九州帝国大学工学部造船学科を卒業，直ちに同大学大学院に特別研究生として入学，22年9月その前期の課程を終了の後九州帝国大学流体工学研究所嘱託となり，23年1月九州大学流体工学研究所助教授に任ぜられました．ついで昭和26年4月流体工学研究所が組織変更によって応用力学研究所となるに伴い，同研究所助教授，更に38年3月船舶安全性部門の教授に就任され，それ以来御逝去の日まで同部門の教授として研究と教育に尽くされました．

この間，先生は永年にわたって旺盛な研究意欲をもって船舶工学及び海洋工学の分野の研究に従事し，多くの輝かしい業績を残されました．なかでも，波浪中で動揺する船体断面に作用する流体力の計算法は田才・アーセル法として船体動揺の計算法の基礎となり世界的に高く評価されております．又船体の横波中の動揺について組織的な研究を行い，それまで未完成のまま残されていた横方向動揺の理論を完成し実験的にその正しさを検証されました．この研究により昭和41年造船協会賞及び日本海事協会賞を受けられました．又，早くから海洋工学の研究の重要性に着目し，浮遊式海洋構造物の波浪中の運動及び繋留について先駆的な研究を推進されました．その間，教育の面では，九州大学大学院工学研究科指導教授として，また国内及び国外の諸大学の講師として学生の教育と研究指導に尽力されました．

先生は30有余年の永きにわたりひたすら研究所と共に歩まれました．昭和38年に完成の海洋災害研究用大型試験水槽の建設及び昭和37年より56年にわたる海洋関係の6研究部門の設置には主要な役割を果たされました．また文部省臨時事業費により昭和46年より海洋計測技術の開発を目的とするプロジェクト研究をスタートさせ，永年にわたりその研究班の委員長をつとめられました．さらに，昭和41年4月より51年3月まで応用力学研究所附属津屋崎海洋災害実験所長，昭和51年4月より53年3月までは応用力学研究所長として，応用力学研究所の管理運営に当たられました．今日の研究所の発展は先生のお力に負う所まことに大であります．また，先生は，九州大学評議員，原子力委員会委員，情報科学委員会委員，施設委員会委員，海外学術委員会委員，等を歴任，九州大学の運営に参画されました．

さらに学外においては，日本造船学会試験水槽委員会委員及び幹事，海洋工学委員会委員及び同委員会性能分科会委員を多年にわたりつとめられました．なお，昭和44年11月より日本造船学会評議員，昭和50年5月より2年間同学会理事として貢献され，その功績により昭和54年4月より同学会功労員に推薦されました．また西部造船会評議員，国際試験水槽会議耐航性技術委員会の日本代表，海洋工学懇談会世話人代表，学術審議会専門委員等をもつとめられました．

先生は若い人の面倒をよく見られ，磊落なお人柄と卓越した識見により，すべての人に敬愛されました．ところが不幸にも，1昨年の夏突然に病魔の冒すところとなり，長い闘病生活ののち，ついに不帰の客となられました．先生は病苦の中にありながらも，人に接する時常に微笑を絶やされませんでした．また研究教育の職責を片時も忘れることなく，病床にあって最後まで研究と研究室の運営を続けられました．先生はまだお若く，今後の御活躍が大いに期待されておりましただけに，先生を喪いましたことはまことに痛恨の極みであります．

ここに先生の御遺徳を永く偲ぶための論文集を刊行するに当たり，その御功績を称え，謹んで御冥福をお祈り申し上げる次第であります．

なお，九州大学医学部附属病院に入院中の故田才教授を現代医学の総力を尽くして治療にあたられた九州大学医学部放射線科松浦啓一教授から本記念論文集のために特別寄稿を賜わりました．同教授に対し心から御礼を申し上げます．

昭和57年5月31日

九州大学応用力学研究所長　種子田　定　俊